

天然歯移植術を併用したソケットリフト法

吉永 修

KeyWord 1 歯小囊、2 ヘルトウィッヒ上皮鞘、3 歯根膜

現在では、欠損補綴においてインプラント治療がトレンドとなっているが、20年以上前においては外科分野において、歯牙移植が頻繁に行われていた。

では、歯牙移植はインプラントに対して、予知性が劣るのであるだろうか。適応症の選択・術式を正しく行うことによって、インプラントが普及した現在においても、歯牙移植は予知性の高い治療法として応用することが可能ではないかと私は考えている。

最近、ショートインプラント・傾斜埋入を私も臨床に応用しているが、口腔内に余剰歯（智歯）が存在する症例においては、移植を治療の第一選択肢としている。インプラントはあくまでも異物であり、生体に慢性炎症を引き起こすからである。

また、症例においては、サイナスを挙上しなければならない場合もあり、生体に対する侵襲・リスクが大きくなりやすい。

そこで、発生学的に固有歯槽骨は、歯周組織であるという理論の基に、健全な歯根膜が存在していれば、上顎洞内にも固有歯槽骨が形成されるのではないかと考え、智歯移植術を併用したソケットリフト法を試みることにした。

今回、40代・女性に智歯を応用して移植術を行うと同時に、サイナスエレベーションを行い、5年経過した予後良好な症例を経験したので、私なりの理論とテクニックを紹介したいと思う。